

出エジプト記9章13節－10章「かつてなく、二度とない災い」

1A 雹による災い 9:13－35

- 1B すべての災害 13－21
- 2B 火の混じった雹 22－26
- 3B 作物の壊滅的打撃 27－35

2A 蝗による災い 10:1－20

- 1B イスラエルへの証し 1－6
- 2B 壮年だけの礼拝 7－11
- 3B 雹の害を免れた作物への打撃 12－20

3A 暗闇による災い 10:21－29

- 1B 三日間の真っ暗闇 21－23
- 2B 家畜を置いた礼拝 24－29

本文

出エジプト記9章を開いてください、私たちは今晚、主が下されたエジプトに対する災いの最後の部分を見て行きます。主は合計、十の災いを下されます。十という数字は、聖書ではしばしば「試す」時に出てきますが、エジプトのファラオがはたしてイスラエルの民を出て行かせるかどうか、試しておられる訳です。ついに出て行かせるのが最後の災いによってですが、その前の九つの災いは、三つの災いを三つの周期に分けることができます。第一、第二、第三の災いが一周目。第四、第五、第六の災いが二周目。そして第七、第八、第九が三周目です。私たちは今晚、この三周期の災いを見ます。

主が初めに下された三つの災い、ナイルを血に、かえる、そしてぶよですが、この時には神の力は、悪のそれよりも強く、大きいことを見ました。呪法師たちは魔術によって、真似することができませんでした。そして二周目の、あぶの災い、家畜への疫病、そして皮膚への膿という災いにおいては、イスラエルへの神の愛の現れ、救いが現れています。あぶの災いが、イスラエル人の住むゴシェンの地に下りませんでした。そして家畜もイスラエル人の家畜は一切、疫病に罹りませんでした。「区別する」という言葉を神は使われていました。また、二周目の災いでは、エジプトにとって直接的な害が及びました、家畜は彼らの貴重な財産です。それから、膿が皮膚にできるという直接的な災いがあります。では、三周目の災いを観てみましょう。

1A 雹による災い 9:13－35

1B すべての災害 13－21

13 【主】はモーセに言われた。「明日の朝早く、ファラオの前に立ち、彼に言え。ヘブル人の神、【主】はこう言われる。『わたしの民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。』

それぞれ三つの災いの始まりは、モーセがファラオの前に立つところから始まります。第一の災いではナイル川のほとりに来たファラオに語り、第四の災いでは、水辺に出てきたファラオに語りました。ナイル川というように特定されていません。そしてここでは、水のことは言及されていません。ファラオへの打撃はあまりにも強く、彼はナイル川にも、水辺にも出ていけなかったのではないのでしょうか。そこにモーセがやって来ます。そして、興味深いことにここでは、もはやアロンの名がありません。モーセは、アロンを代弁者として語っていましたが、もはやそのようなことは行っておらず、彼自身が直接、対峙しているのでしょう。ファラオによっては彼は神のような位置に立っていましたから、その衝撃はかなり強いものと思われれます。

14 今度、わたしは、あなた自身とあなたの家臣と民に、わたしのすべての災害を送る。わたしのような者が地のどこにもいないことを、あなたが知るようになるためである。

最後の三つの災いの特徴がここに書いてあります。「わたしのすべての災害」であります。神が、ご自分の民を出て行かせない罪に対して、あらゆる限りの災いを下すということであります。以前、将来、神がご自分の怒りを現わす大患難は、このエジプトに対する神の裁きを原型として行われる話をしました。そこで神が最後に下す七つの鉢の災いについて、主はこのように言われました。「ここに憤りは極まるのである。(15:1)」七つの鉢の七つ目をぶちまけたら、御座から、「事は成就した(16:17)」という声があります。全てがそれで終わった、神の憤りの極みまでが現れたということです。そういった意味での「すべての災害」であります。

そして、第七の災いの目的がここに書かれています。「わたしのような者が地のどこにもいないことを、あなたが知るようになる」ファラオは自分が神のように考えていて、エジプトの神々とヘブル人の神を同列に考えていました。自分が中心で、自分の治めているエジプトも自分のものであるとする高ぶりが、彼を支えていましたが、それを神が打ち砕かれます。私たちが世に生きて、何をもって高ぶっているかと言いますと、それは自分が中心で、自分の周りのものは自分で治めているという高ぶりです。

そして神は、ご自分が比類なきお方であることを現わそうとされます。比べることのできない、あらゆる名よりも、偉大な名を持っておられることを示そうとされます。聖書の歴史の中で、神が御怒りを現わされるのは、ご自身が他の神々と同列に置かれた時でした。例えば、アッシリアが、自分たちが征服した神々と、エルサレムの神を一緒くたにしたので、アッシリア軍を打ち滅ぼされました。もちろん、世はそのことを知らないで、「なぜ神だけなのか?」「なぜイエスだけなのか?」ということなのです。他の神々と呼ばれているもの、偉大だと呼ばれているもの同列において、神とキリストを考えます。それは初めは最もなことですが、しかし、イエス・キリストがいかに偉大で、いかに独特で、比類なき方であるかたを知ることによって、まことの神に出会うことができます。

15 実に今でも、わたしが手を伸ばし、あなたとあなたの民を疫病で打つなら、あなたは地から消し去られる。16 しかし、このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため、そうして、わたしの名を全地に知らしめるためである。

ここに、神の寛容さが表れています。神は、彼らを今、滅ぼすものならいとも簡単にできたと言われます。そしてパロが民を出て行かせないことを神はよくご存知でした。それにも関わらず、彼らに猶予を与える形で災いを下しておられるのは、第一に彼らに忍耐しておられるからです。神はたとえ、その人が最後まで悔い改めないことを知っておられながらも、最後までその機会を与えてくださる、公平な方です。「ローマ 9:22 それでいて、もし神が、御怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられたのに、滅ぼされるはずの怒りの器を、豊かな寛容をもって耐え忍ばれたとすれば、どうですか。」イエス様は、イスカリオテのユダに対しても同じようなことを行われていました。ユダがご自分を裏切ることは、分かっておられました。けれども、主は最後の最後まで、実に最後の晩餐の時までユダに対して、悔い改めることのできることを伝えておられました。

そして、この寛容な取り扱いと共に、主が意図されているのは、「わたしの力をあなたに示すため、そうして、わたしの名を全地に知らしめるため」とあります。主は、かたくなに民を行かせないファラオを用いて、ご自分がどのような神なのかをエジプト中に、それから世界に知らしめる目的を持っておられるのです。これまでの災いは、エジプトの中だけで語られて彼らはそれを覆い隠そうとすれば、歴史から隠せたことでしょう。しかし、これから三つの災いは隠せません。あまりにも徹底的なので、そのことでヘブル人の神がいかに畏れ多い方なのかを周りの民も知るようになるというものです。後に、ヨシュア記でラハブがエリコで住民が恐れていたことを話したことを思い出してください。またサムエル記において、神の箱を戦いの場にイスラエル人が持ってきた時に、ペリシテ人の間にやはり、このことが広まっていることが記録されています。エジプトの文献にはありませんが、このように、既に言い伝えられていたのです。

17 あなたはなお、わたしの民に向かっておごり高ぶり、彼らを去らせようとしない。

先に言いましたように、ファラオの高ぶりは、神の民であったものを自分の所有物だと思っていたことです。すべては神から来ていることを認めないことが、高ぶりです。

18 見よ。明日の今ごろ、わたしは、国が始まってから今に至るまで、エジプトになかったような非常に激しい雹を降らせる。

エジプトの国が統一されて以来の激しい雹ということですが、東日本大震災は、千年に一度の地震と呼ばれましたが、エジプトでは統一建国以来の恐ろしい災難であります。主が終わりの日、大患難の時にも同じように、これまでにない災いを降り注がれます。イエス様が弟子たちに言われま

した、「マタイ 24:21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決していないような、大きな苦難があるからです。」ここではエジプト建国以来どころか、世の始まりから今に至るまでの最も大きな苦難であります。

19 さあ今、使いを送って、あなたの家畜と、野にいるあなたのすべてのものを避難させよ。野に残されて家に連れ戻されなかった人や家畜はみな、雹に打たれて死ぬ。』20 ファラオの家臣のうち【主】のことは恐れた者は、しもべたちと家畜を家に避難させた。21 しかし、【主】のことは心に留めなかった者は、しもべたちと家畜をそのまま野に残しておいた。

興味深いです、主は選択を与えられています。そして、見事にそれに二つの反応が出ました。ある人は真剣に主のことは受け取り、その通りに動きました。別の家臣は無視しました。いつでも、私たちには、主の御言葉に対して二つの反応があります。行動を持って反応するか、それとも何の行動も取らないかの二つです。

ところで、先にエジプトの家畜が疫病で倒れたのに、なぜここでファラオの家臣たちが家畜を有しているのか、という疑問を抱く人がいるかもしれません。まず知らなければいけないのは、災いと次の災いの間には時差があるということです。その期間にエジプトの役人たちは、外国から家畜を取り寄せたのでしょう。エジプト人が、外国から家畜を取り寄せるという記録が残っています。

2B 火の混じった雹 22-26

22 そこで【主】はモーセに言われた。「あなたの手を天に向けて伸ばせ。そうすれば、エジプト全土にわたって、人にも家畜にも、またエジプトの地のすべての野の草の上にも、雹が降る。」23 モーセが杖を天に向けて伸ばすと、【主】は雷と雹を送ったので、火が地に向かって走った。こうして【主】はエジプトの地に雹を降らせた。24 雹が降り、火が雹のただ中をひらめき渡った。それは、エジプトの地で国が始まって以来どこにもなかったような、きわめて激しいものであった。

雹のみならず、火も含まれていました。雷も含まれていました。ここに、神の聖なる姿、また裁かれる姿が現れています。雹による災いも、終わりの日における神の怒りの型になっています。黙示録 8 章にラツパの災いがありますが、第一のラツパが吹き鳴らされた時に、「血の混じった雹と火が現われ」とあります(7 節)。そして最後の最後の災い、第七の鉢がぶちまけられた時も、雹が地上に降りました。「16:21 また、一タラントほどの大きな雹が、天から人々の上に降った。この雹の災害のために、人々は神を冒瀆した。その災害が非常に激しかったからである。」一タラントは 34 キロなので、どれだけ恐ろしいものがお分かりになると思います。

25 雹はエジプト全土にわたって、人から家畜に至るまで、野にいるすべてのものを打った。またその雹は、あらゆる野の草も打った。野の木もことごとく打ち砕いた。

雹による打撃は、家畜のみならず、野にある草にも及びました。この後に出てきますが、作物に大きな打撃が加えられました。エジプトにとって、いや、どこの国にとってもそうですが、作物に被害が及ぶということは自分たちの生命や拠り所を断たれるような、非常に強い衝撃であったに違いありません。経済はズタズタになり、パロに対する信頼や威厳は、エジプト人に失われていっていると思います。

主は今、ご自身が天においても主であり、地においても主であることをはっきりと示しておられます。彼らの所有しているものに手を触れた主は、今は、根本的に彼らが支えられている地上を、また天に災いをもたらすことによって、彼らを揺り動かしておられるのです。エジプト人は、空も、地も神としていました。地については、ぶよの災いのところで話しましたが、ケブという神でした。そして空の神も同じところに描かれていますが、「ヌト」と呼ばれます。



26 ただ、イスラエルの子らが住むゴシェンの地には、雹は降らなかった。

ここに、救いがありました。イスラエルは神の怒りである雹の災いから、安全に守られていました。私たちの救いも、神の怒りからの安全な守りがあります。「神は、私たちが御怒りを受けるのではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。(1テサロニケ 5:9)」イスラエルは地上にいながらにして守られましたが、教会は地上から取り除かれることによって災いから守られます。

3B 作物の壊滅的打撃 27-35

27 ファラオは人を遣わしてモーセとアロンを呼び寄せ、彼らに言った。「今度は私が間違っていた。【主】が正しく、私と私の民が悪かった。28 【主】に祈ってくれ。神の雷と雹は、もうたくさんだ。私はおまえたちを去らせよう。おまえたちはもう、とどまっていたはならない。」

ファラオは、さらに突っ込んだ、悔い改めに聞こえるような発言をしています。はっきりと「間違っていた」と言っています。そして、「主」を正しいとし、「私と私の民が悪かった」としています。これが、はっきりとした悔い改めです。

しかし、彼の心には欺きがありました。「【主】に祈ってくれ。神の雷と雹は、もうたくさんだ。」というところです。真実な悔い改めと、そうでないものの違いがここにあります。主がなされている仕打ちについて、その裁きについて、甘んじて受けているか、ただその状況から脱却したいから言っているのかは、大きな違いです。ダビデが、バテシェバのことで罪を犯したことを告白した時に、自分の受けている仕打ちを甘んじて受けて、それで神の裁きは正しいことを話しています。「詩篇 51:4 私はあなたにただあなたの前に罪ある者です。私はあなたの目に悪であることを行いました。ですからあなたが宣告するときあなたは正しくさばくときあなたは清くあられます。」

そして、状況から脱却したいという願いと、そうではなく裁きを甘んじて受けて救いを求めている対照的な出来事が、イエス様と共に十字架に付けられた囚人二人がいます。「ルカ 23:39-43 十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」と言った。すると、もう一人が彼をたしなめて言った。「おまえは神を恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」そして言った。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」

29 モーセは彼に言った。「私が町を出たら、すぐに【主】に向かって手を伸べ広げましょう。雷はやみ、雹はもう降らなくなります。この地が【主】のものであることをあなたが知るためです。30 しかし、あなたとあなたの家臣はまだ、神である【主】を恐れていないことを、私はよく知っています。」

地は主のものであり、ゲブのものではないし、ましてやファラオのものではありません。

そしてモーセは、既に何度となく、ファラオとその家来たちの心を見てきました。人の心の欺きを見てきました。頑なな心にある欺きです。「ヘブル 3:12-13 兄弟たち。あなたがたのうちに、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。「今日」と言われている間、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされて頑なにならないようにしなさい。」

31 亜麻と大麦は打ち倒されていた。大麦は穂を出し、亜麻はつぼみをつけていたからである。32 しかし、小麦と裸麦は打ち倒されていなかった。これらは実るのが遅いからである。33 モーセはファラオのもとを去り、町を出て、【主】に向かって両手を伸べ広げた。すると雷と雹はやみ、雨はもう地に降らなくなった。

おそらくこの時期は二月頃でしょう。亜麻も大麦も三月に収穫が行われます。けれども小麦は四月頃の収穫です。ちなみに、イスラエルでは大麦が四月に収穫、小麦が五月下旬に収穫です。ここでの味噌は、まだ打ち倒されていなかった作物があったということです。

34 ファラオは雨と雹と雷がやんだのを見て、またも罪に身を任せ、彼とその家臣たちはその心を硬くした。35 ファラオは心を頑なにし、イスラエルの子らを去らせなかった。【主】がモーセを通して言われたとおりであった。

ファラオは、難を逃れた小麦を見たのでかたくなになりました。「なんだ、まだ希望があるじゃないか。」とエジプトに対する誇りと自慢を捨てることがなかったのです。私たちはわずかな希望を自分自身のうちに見出すと、それがいかに頼りないかは見ずして、「まだ自分はやっていける」と思ってしまうのです。主は、悔い改めることができるように、全てを滅ぼさないでおられる忍耐深い方なのに、その忍耐を自分を高ぶらせる機会として使ってしまいました。主の忍耐を、主の弱さと受け取る、人間の愚かさがあります。

2A 蝗による災い 10:1-20

1B イスラエルへの証し 1-6

1 【主】はモーセに言われた。「ファラオのところに行け。わたしは彼とその家臣たちの心を硬くした。それは、わたしが、これらのしるしを彼らの中で行うためである。2 また、わたしがエジプトに対して力を働かせたあのこと、わたしが彼らの中で行ったしるしを、あなたが息子や孫に語って聞かせるためである。こうしてあなたがたは、わたしが【主】であることを知る。」

第八の災いの始まりです。主は、次の目的を明らかにされました。それは、ご自分の力をファラオとエジプト、そして世界に知らしめるだけでなく、イスラエルの民自身が主を知るためであると言われます。それを子孫に言い伝えるためであると教えられます。このことを過越の祭りとして神は、定められます。また旧約聖書の至るところに、例えば詩篇などで、出エジプトにおける神の偉大な御業が書き記されています。これこそが、イスラエルの民が自分たちのことを確認する出来事になります。私たち教会も全く無関係では全然ありません。聖餐は、まさに過越の食事の一場面です。聖餐にあずかることによって、私たちがキリストの体であることを確認しているのです。

ここで興味深いことに、「わたしは彼とその家臣たちの心を硬くした。」とあります。前回、お話し

たように、これはファラオが選択することができないようにしているのではなく、彼の心の頑なさをも神の主権の中であって、ご自分の御心のままに支配しておられることを意味します。ローマ 9 章でパウロが、こう述べます。「9:23 しかもそれが、栄光のためにあらかじめ備えられたあわれみの器に対して、ご自分の豊かな栄光を知らせるためであったとすれば、どうですか。」神が、ファラオの心の頑なさを用いて、憐れみの器、つまりイスラエルにご自分の豊かな栄光を知らせようとしておられます。そしてキリストにあって、異邦人にも知らせようとしておられます。

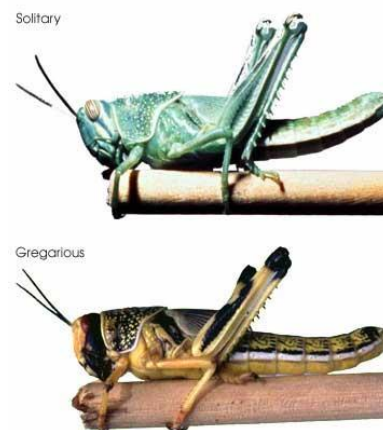
3 モーセとアロンはファラオのところに行き、彼に向かって言った。「ヘブル人の神、【主】はこう言われます。『いつまで、わたしの前に身を低くするのを拒むのか。わたしの民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。』」

ファラオの高ぶりが、人の前ではなく、主の前、神の前であることが明確に書かれていますね。私たちが人に対してどうなのか？と考えている時に、しばしば忘れてしまうのは、「主の前に出ているか？」ということです。

4 もしあなたが、わたしの民を去らせることを拒むなら、見よ、わたしは明日、いなごをあなたの領土に送る。5 いなごが地の面をおおい、地は見えなくなる。また、雹の害を免れてあなたがたに残されているものを食い尽くし、野に生えているあなたがたの木をみな食い尽くし、6 あなたの家とすべての家臣の家、および全エジプトの家に満ちる。これは、あなたの先祖も、またその先祖も、彼らがこの土地にあった日から今日に至るまで、見たことがないものである。』」こうして彼は身を翻してファラオのもとから出て行った。

蝗の災いです。これは雹の災いよりもさらに酷いものであるかは、二つのことで分かります。一つは、雹はあくまでも地表にある作物を倒しただけですが、いなごは地中にある芽までも根こそぎ食べつくしてしまいます。もう一つは、その規模がエジプトの建国以来のものではなく、人間の歴史が始まって以来のものであると強調しています。

蝗の襲撃は、とてつもなく恐ろしいものです。2011 年 5 月末のニュースでは中国新疆で蝗が大量発生で被害を受けたそうです。一平方メートルあたり 2500 匹という密度であったそうです。つまり一平方キロメートルあたりにすると 2500 万匹になります。襲来後の土地は何年も耕作ができなくなってしまうようで、単なる早魃よりも被害は酷いです。蝗にも、いろいろな種類があり、個体で動くものもあるのですが、相変異と言って、本来の緑ではなく黄色や黒に変化するそうです。とてつもない大群で飛翔するようで、なんと風に乗って、一日辺り 100-200 キロメートルを飛行するのだそうです。高度も、二千キロメートルというとてつもない高さです。アフリ



カ、中東、アジアの一带で飛んでいる蝗を、「サバクトビバッタ」というそうです。¹

聖書ではヨエル書というところに、ユダに蝗が襲う預言があり、それが一糸乱れず大量に押し寄せてくる軍隊の予兆となっています。そして黙示録 9 章では、なんと悪霊が蝗のような形をして大量に現れ、尾にはサソリのような棘があり、五か月の間、苦しみ悶えますが死ぬことさえできないというホラー映画よりも恐ろしいことが起こります。

2B 壮年だけの礼拝 7-11

7 家臣たちはファラオに言った。「この男は、いつまで私たちに陥れるのでしょうか。この者たちを去らせ、彼らの神、【主】に仕えさせてください。エジプトが減びるのが、まだお分かりにならないのですか。」

ついに家臣たちがファラオに進言します。家臣であっても、あまりにも明らかなことだったので、このままではエジプトが減びます。

8 モーセとアロンはファラオのところに連れ戻された。ファラオは彼らに言った。「行け。おまえたちの神、【主】に仕えよ。だが、行くのはだれとだれか。」9 モーセは答えた。「若い者も年寄りも一緒に行きます。息子たちも娘たちも、羊の群れも牛の群れも一緒に行きます。私たちは【主】の祭りをするのですから。」10 ファラオは彼らに言った。「私がおまえたちとおまえたちの妻子を行かせるようなときには、【主】がおまえたちとともにあるように、とでも言おう。だが、見ろ。悪意がおまえたちの顔に表れている。11 そうはさせない。さあ、壮年の男子だけが行って、【主】に仕えよ。それが、おまえたちが求めていることではないか。」こうして彼らはファラオの前から追い出された。

ファラオの妥協案の二つ目です。一つは、「国内でいけにえを捧げなさい」というものでした。あるいは、遠くないところで捧げなさいというものでした。世において生活を変えなくてよい、また今までやって来たことから遠く離れなくてそのままキリスト者の生活をしなさいというものでした。そしてここでは、「壮年だけの捧げ物」を言い出しています。子供は置いていなさい、妻も置いていなさい、あなたがたが神に興味があるのだろうか？それを妻も子供も巻き添えにして、お前たちには悪意がある、というものです。いいえ、ファラオは妻や子供を人質にできると思ったのでしょうか。これが、世の妥協というものです。

今の時流でもっともとされる考えではないでしょうか？「子供に権利を与えなければいけない。」「子供に選ばせなければいけない。」そして、子供に自分の価値観を押し付けてはいけない、と言って、自分の信仰を子息に継承するのは間違っていると感じます。聖書には、モーセによって与えられた十戒があります。初めの四つの戒めは神と人との関係を取り扱っていますが、第五から第

¹ <https://ja.wikipedia.org/wiki/サバクトビバッタ>

十の戒めは対人関係です。この第五の戒めに来るのは、「あなたの父と母を敬え。」です。なぜでしょう？それは、神は親をご自分の権威を任せる代理者にされたからです。両親の言うことを聞くということは、多くの場合、神ご自身に聞き従うということに他なりません。彼らは親の権威の下にいることによって、神の権威を知ることができます。

3B 雹の害を免れた作物への打撃 12-20

12 【主】はモーセに言われた。「あなたの手をエジプトの地の上に伸ばし、いなごの大群がエジプトの地を襲い、その国のあらゆる草木、雹の害を免れたすべてのものを食い尽くすようにせよ。」

13 モーセはエジプトの地の上に杖を伸ばした。【主】は終日終夜、その地の上に東風を吹かせた。朝になると東風がいなごの大群を運んで来た。

先ほど話したように、風によって蝗は動きます。そして、聖書には東風が、作物を干からびさせる乾燥した熱風としてしばしば現れます。神の裁きが来るところは、東からになっています。具体的には、紅海から吹かせているのでしょう。

14 いなごの大群はエジプト全土を襲い、エジプト全域にとどまった。これは、かつてなく、この後もないほどおびただしいいなごの大群だった。15 それらが全地の表面をおおったので、地は暗くなり、いなごは地の草と、雹の害を免れた木の実をすべて食い尽くした。エジプト全土で、木や野の草に少しの緑も残らなかった。

まさに、根こそぎ作物や緑のものが奪われてしまいました。

16 ファラオは急いでモーセとアロンを呼んで言った。「私は、おまえたちの神、【主】とおまえたちに対して過ちを犯した。17 どうか今、もう一度だけ私の罪を見逃してくれ。おまえたちの神、【主】に、こんな死だけは取り去ってくれるよう祈ってくれ。」

ファラオがパニックに陥っています、急いでモーセとアロンを呼びました。そして、蝗の襲来のことを、「こんな死」と呼んでいます。彼は、これが、死がもたらされたとみなしたのです。

18 モーセはファラオのところから出て、【主】に祈った。19 すると【主】は風向きを変え、非常に強い、海からの風とされた。風はいなごを吹き上げ、葦の海に追いやった。エジプト全域に一匹のいなごも残らなかった。20 しかし、【主】がファラオの心を頑なにされたので、彼はイスラエルの子らを去らせなかった。

西の風は地中海から来ているものです。こちらは温暖な、湿気を含んだ風であります。いなごの襲来もすごいですが、一匹もいなくなる風もすごいです。そして、主は積極的にファラオの心の頑

なさに関わっておられます、「【主】がファラオの心を頑なにされた」と言われています。

3A 暗闇による災い 10:21-29

1B 三日間の真っ暗闇 21-23

九つ目の災いです。警告なしで、災いを引き起こされます。

21 【主】はモーセに言われた。「あなたの手を天に向けて伸ばし、闇がエジプトの地の上に降りて来て、闇にさわれるほどにせよ。」22 モーセが天に向けて手を伸ばすと、エジプト全土は三日間、真っ暗闇となった。23 人々は三日間、互いに見ることも、自分のいる場所から立つこともできなかった。しかし、イスラエルの子らのすべてには、住んでいる所に光があった。

九つ目の災いは「暗やみ」です。闇が触れる程にせよ、というのは単に暗いだけでなく、洞窟の中にいるような暗さであります。目が暗さになれてもなお何も見えない状態、目の一センチ先で指を動かしても見えない状態です。それが三日続きました、エジプト人は半狂乱状態に陥ったことでしょう。大患難においても、反キリストの国の獣の座に鉢がぶちまけられ、王国全体が闇に覆われ、人々が苦しみのあまり舌をかんだ、とあります(16:10)。しかし、ここでもイスラエルには救いを与えられました、光があります。イエス様は、「わたしは世の光です。(ヨハネ 9:5)」と言われましたが、神の与える暗闇の中でも、希望も何もない罪に満ちた世にあっても、キリストにあって私たちは光を持つことができます。



ところでエジプト人にとっては、太陽にまつわる神々はたくさんいました。ラーという太陽神がいます。大気の守護神、豊穡神であるアメンと一体化して、「ラー＝アメン」とも呼ばれていました。そしてその他のいろいろな代表的な神々も、何らかの形で太陽を宿しています。太陽という存在がそれだけ彼らには大きかったのです。

2B 家畜を置いた礼拝 24-29

24 ファラオはモーセを呼んで言った。「行け。【主】に仕えるがよい。ただ、おまえたちの羊と牛は残しておけ。妻子はおまえたちと一緒にいってもよい。」25 モーセは言った。「あなた自身が、いけにえと全焼のささげ物を直接私たちに下さって、私たちが、自分たちの神、【主】にいけにえを献げられるようにしなければなりません。26 私たちの家畜も私たちと一緒にいきます。ひづめ一つ残すことはできません。私たちの神、【主】に仕えるために、家畜の中から選ばなければならないからです。しかも、あちらに着くまでは、どれをもって【主】に仕えるべきか分からないのです。」

ファラオの第三の妥協です。最後の最後まで、自分が支配できるものを残したいと願っています。

幼子の件については折れた。けれども家畜は残していきなさい、というものです。いけにえが家畜だということもありますが、どれを持ってささげればよいか示されていないのだから、すべてを持って行かないといけないモーセはいいます。

ファラオは、「信仰生活を送るのは良い。けれども献金はするな。」と言っているのと等しいのです。しかし私たちの信仰は、心と思いのみならず、いや心と思いが正しい方法に向いているのであれば、自分の財産自体が主のものであることを知っているはずで、お金と言うのは不思議な力を持っています。「マタイ 6:20-21 自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあるのです。」私たちが自分の心と財産を分けることができないのは、財産のあるところに心も引き寄せられるからです。ですから、心から主を礼拝したいと思う時は、時間や自分の能力のみならず、金銭においても神に捧げるのです。

27 しかし、【主】がファラオの心を頑なにされたので、ファラオは彼らを去らせようとはしなかった。
28 ファラオは彼に言った。「私のところから出て行け。私の顔を二度と見ないように気をつけろ。おまえが私の顔を見たら、その日に、おまえは死ななければならない。」29 モーセは言った。「けっこうです。私はもう二度とあなたのお顔を見ることはありません。」

交渉決裂というところでしょうか。この後に、主がモーセに最後の災いを啓示されて、それでも一度、ファラオに会いに行きます。神は、ご自分の義をしもべを通して示されます。そして、そこで示されるのは闇の部分、あるいは高ぶりです。神の救いの御業がどこで止まるか？といったらこの高ぶりでしょう。しかし、神はそれでもファラオに語りかけ、悔い改めるように促されます。その度に、神への怒りが積み上がるようなことをファラオは行っていきます。しかし、その間に、選びの民、イスラエルに対する救いの働きは進展していくのです。これを私たちも経験します。